

## 「自分らしい生き方」に寄り添う

ある日、祖父の寝室を開けてみると、そこにはなんとも言えない匂いがたちこめていた。トイレに行くことが困難な祖父のためにベッドの横にポータブルトイレを設置してはあつたのだが、祖父はごみ箱の中に排泄していた後だった。「じいちゃん、トイレ間に合わなかつたの？」そう聞くと、「こっちのほうがいいだ」と返答があつた。祖母が「ポータブルトイレが間に合わないのなら、オムツしたほうがいいだねえか」と勧めると、祖父は「そんな歳食つてねえわ」と表情を曇らせた。

後日、学校の研修旅行で、ある僧侶から「その人の生きてきた背景を考える」というお話を聞いた。それは、その人の現在の一点のみを見つめるのではなく、その点に至るまでの人生を思い描いてみよ、というものであつた。祖父は、晴耕雨読という四字熟語通りの生き方をしてきた人である。土いじりが好きで、暇さえあれば外に出ていつていたころの祖父を思い出す。考えてみれば、元気な時は外に出るだけで家族以外の人と会話をする機会があつた。自然の空気を思い切り吸い、汗水流して畑を耕すことに、自分の生きがいを感じていたはずだ。そして、私が生まれるずっと前の、祖父が辿つてきたこれまでの人生を想像してみると、戦争を経験し、貧困を経験し、それでも復興に力を注いだ時代を経験してきた祖父の背景というものは、私には計り知れないものがあつた。そんな祖父も、今や様々な人の援助を必要としなければ生きていけなくなつてしまつた。しまいには、「オムツをしたらどうだ」と促される始末である。現在の一点のみを見つめると自然な老化現象なのかもしれないが、その、点が辿つてきた背景にまで目を向けると、それを受け入れられないでいる祖父の気持ちのほうが、痛いほど心にしみた。同時に、祖父のように何か言いたくても言えない人の思いをどう引き出せばいいか考え、思いを汲み取れるような看護ができるようになりたいと、強く思つた。それだけではない。盲目の人の光になりたい。難聴、あるいは、年老いて耳が不自由になつた人の、音になりたい。足を切断した人の、杖になりたい。若くして母親になつた人の、知識になりたい。そして、死を目前とする人の、希望になりたい。出会うかもしれない全ての患者に、よりよい看護を提供できるような看護師に、私はなりたい。

その人が今までどのような人生を送つてきたのかを想像することは難しい。100人いれば100通りの、その人らしい生き方がある。目の前にいる人が皆自分と同じ考え方や価値観だとは限らない。しかし、その人の心に寄り添い、生きてきた背景を想像し、今なぜそのような生き方をしているのかということを考えることは、とても大切なことである。私は、一人でも多くの患者に「自分らしい生き方」を提供できる看護師を目指したい。